

フランス実証主義史学の成立と

ガブリエル・モノー

目次

- 一 はじめに
- 二 普仏戦争の衝撃と歴史学
- 三 歴史学の革新者モノー
- 四 (一) 一八六〇年代の歴史学雑誌
(二) 『史学雑誌』の創刊
- 五 歴史学の組織者モノー
むすび

渡邊和行

一 はじめに

ガブリエル・モノーは、忘れられた歴史家となった感がある。せいぜい『史学雑誌 *Revue historique*』の創刊者として、記憶されている程度ではなからうか。確かに人口に膾炙しているのは、モノーではなくて、テーヌ、ルナン、フュステル・ド・クランジユである。それは後者の三名の代表作が、邦訳されていることにも示されている。⁽¹⁾ それでは今日、モノーを論ずる意義は奈辺にあるのであろうか。それは以下の三点に求められるであろう。第一に、アカデミックな歴史学の確立との関連である。デュルケームの遡源的方法に従うならば、われわれは今日のフランス歴史学の直接の起源を、学問としての歴史学がフランスの大学に成立した一九世紀後半に見いだすのである。前稿⁽³⁾においても指摘したように、この時期、独立科学としての歴史学を誕生させたのは、モノーを中心とした歴史家たちであった。モノーより著名なテーヌ、ルナン、フュステル・ド・クランジユは、フランスの歴史学の確立には殆ど役割を演じていないのである。モノーを中心とした歴史家集団こそが、フランス歴史学の制度化を成しとげたのである。第二に、モノーが切り拓いた歴史研究の分野との関連である。今日の中世史研究にせよミシュレ研究にせよ、その成果はすべて、モノーが開拓し整地したうえに蒔かれ刈りとられたものであるといつてよいであろう。モノーは中世の史料集やミシュレの書簡の刊行に努め、これらの研究分野の土台を築いたのである。モノーは、パイオニアであった。⁽⁵⁾ 第三に、今日の社会史パラダイムとの関連である。ここでもモノーの重要性は、再び増したと言いうる。なぜならフランスの史学史上、モノーはミシュレとアナル学派とを媒介する歴史家として位置づけられるからである。ミシュレの継承者が、モノーであった。同時代人のカミーユ・ジュリアンがモノーを、「ミシュレを最もよく知り、かれの追

憶に最も忠実な史家」と評したことに、それは表われている⁽⁶⁾。リュシアン・フェーヴルも「歴史の権化」たるミシユレの友の一人として、モノーを挙げている⁽⁷⁾。つまりモノーは、一九世紀のフランス史学と二〇世紀のアナール史学とをつなぐハイフンの役割を果たしたのである。

本稿は、先述した第一と第二の点について論証することを目的としている(第三の点については、別稿を用意している)。屢述すれば、本稿は学問としての歴史学、独立科学としての歴史学の制度づくりに尽力したモノーの活動を描写することを通じて、第一に実証主義史学の成立を跡づけること、第二にモノーの歴史思想や歴史学方法論を解明することを目的としている。なぜならモノーの歴史観は、アナール学派に接続する内容をもっていたし、立場の異なるマルキストからも一定程度、評価されていたからである。そのマルキストとは、「ロシア・マルクス主義の父」と称されるプレハーノフである。かれは『歴史における個人の役割』のなかで、ランプレヒト論争に言及しつつ、モノーを「現代フランスの歴史科学のもっともすぐれた代表者の一人」と評価していたのである⁽⁸⁾。従ってモノーの弟子の一人であるクリスチャン・フィステル(一八五七—一九三三)が、次のように記しても、それは決して誇張ではないのである。「絶えずモノーの思い出に立ち返ることなくして、一九世紀後半と二〇世紀初めのフランス史学の発達の一覧表を提出することはできない⁽⁹⁾。」

本稿は前稿の続稿であり、対象とする時期は、歴史家モノーが誕生し、歴史のための闘いを本格的に開始した一八七〇年以降である。歴史家モノーの原型が形成される六〇年代までのモノーについては、前稿を参照していただきたい。

本論にはいる前に、本稿で用いる「実証主義」の語義について一言しておきたい。語義にまつわる無用の混乱を避けたいからである。モノーが歴史家としての自己形成をとげた第二帝制は、フランス思想史のうえでは、「実証主義の

時代」として知られている。フランス革命以後、フランスは第二の科学革命の口火を切った国であつた。⁽¹⁰⁾自然科学の飛躍的發展を前にして、コントによって体系化されたのが実証主義である。ところがこの実証主義は、その理論的展開の過程で外延を拡大し、多義的な概念を包蔵するにいたつたのである。D・G・チャールトンは、四つの用法を識別している。⁽¹¹⁾歴史学との関連では、少なくとも二つの、しかも対蹠的な語義を指摘しうるであろう。⁽¹²⁾「実証主義」という術語の語義論的な複雑さは、ここに起因するのである。もつともこの複雑さは、「実証主義」の多義性と「実証主義史学」の歴史的転形の反映にはかならないのである。カルボネルやブルデは、頻繁にしかし誤つて用いられるこのような「実証主義史学」に代えて、「方法論的歴史学」ないし「方法論学派」という呼称を与えている。⁽¹³⁾おそらくモノーが、「歴史は科学である以上に方法である」⁽¹⁴⁾と述べたことに起因するのであろう。

語義論的には、本来の意味と派生的な意味の二つを識別しうる。本来の意味とは、オーギュスト・コントの社会学的哲学的実証主義であり、人間社会に自然科学的方法を適用する科学主義である。⁽¹⁵⁾それは第一に事実を観察し確認し、第二にその事実から帰納的に一般化することで法則を組みたてる方法と要約される。⁽¹⁶⁾そして事実から導出された理論によつて、事実の意味が付与され解釈されるのである。このような方法で歴史にアプローチするのが、本来の意味での実証主義史学である。歴史哲学者や史学史の専門家は、このような意味で実証主義を用いている。例えば、二つの意味を指摘しているクローチェを除いて、ベルンハイム、コリングウッド、マンハイム、アントニーニ、ウォルシュらは皆、本来の意味で実証主義を用いているのである。⁽¹⁷⁾バックル、テーヌ、ランプレヒトラが実証主義史家の代表として挙げられるのは、本来の意味においてである。

ところが現実の一九世紀の歴史家の多くは、漸次、諸法則の発見を拒否し、事実の収集と確認に没頭していった。派生的な意味はここから生じたのである。実証主義の派生的な意味は、一九世紀後半のフランス実証主義史学に対す

るさまざまな形容句に明らかである。「歴史のための歴史」(H・ベール)とか、「解釈学的歴史主義」(G・イツガー)とか、「科学的唯名論」(N・カンター、R・シュナイダー)とか、「過剰経験主義」(F・K・リンガー)がその代表的なものであるが、このような名辞からも窺知しうるように、事実志向的で理論や仮説を拒否する反理論的経験主義が、派生的意味である。事実の穿鑿に自足する状態を指し示すこの用法は、リュシアン・フェーヴルの辛辣な批評によつて増幅され広められたのである。もつとも歴史的に眺めてみると、正反対の意味をもつ「実証主義」は、一九世紀から二〇世紀の初めにかけて本来の意味で用いられることが多く、社会史派の誕生とともに派生的意味で批判的に用いられることが多くなつたと言いうる。

カルボネルは、「実証主義 positivisme」に対応する形容詞として positiviste と positif とを区別し、前者を本来の意味での実証主義、後者を派生的意味での実証主義と定義し、この術語の曖昧さを防ぐために、史学史のうえでは positivisme-positiviste (実証主義史学)のみを使用し、 positivisme-positif (実証史学)を用いないよう提言している⁽¹⁹⁾。そのうえでカルボネルは、一九世紀後半のフランスの歴史学が本来の意味での実証主義史学とは正反対に位置していと述べるのである。語義の混乱を避ける点で、カルボネルの定義に筆者も異論はない。しかしフランスの実証主義史学に派生的意味しか認めない点には、疑義がある。フランスの実証主義史家の第二世代には、確かに positif に含意されるような素朴実証主義ないし史料実証主義の弊害が見られたのも事実である。ところが第一世代と第二世代の実証主義史家は、程度の差こそあれ、やはり実証主義の本来の意味をも、その歴史学方法論のなかに取り入れていたように思われる。モノーが師と呼ぶルナンとテーヌ、それにリトレが『史学雑誌』の協力者として名を連ねていたことに留意すべきであろう。なるほどルナンやテーヌの実証主義が、かれらのフィルターによつて歪曲されていたとしても、コント自身よりもコントの『実証哲学講義』に忠実であつたリトレの存在は、⁽²⁰⁾『史学雑誌』が社会学的実証主義の

精神に鼓舞されていることを内外に顕示するものであった。また第二世代のセーニヨボスやアンリ・オーゼルの歴史批判を読むとき、かれらの眼が決して隣接領域に閉ざされていなかったことを知るのである。⁽²¹⁾ この意味で一九世紀後半のフランス歴史学に、反理論的経験主義のレッテルを貼ってすますることはできないのである。実態は、もう少し複雑であつたようである。前稿でも定義したように、筆者のいう「実証主義史学」とは、モノーを中心とした第一世代の歴史観であり、カルボネルの言葉でいえば、それは *positiviste* と *positif* の中間ないし混交したものといえる。⁽²²⁾

- (1) 筆者はモノーの著作がかつて翻訳されたことがあるのかどうか、寡聞にして知らない。博雅の士に御教示願えれば幸いである。テーヌ、ルナン、フュステルの翻訳は以下のとおりである。テーヌ『英国文学史』全三巻、平岡昇訳（創元社、一九四九年）。テーヌ『近代フランスの起源——旧制度——』岡田真吉訳（斎藤書店、一九四七年）。ルナン『イエス伝』津田稷訳（岩波文庫、一九四六年）。ルナン『幼年時代青年時代の思ひ出』杉捷夫訳（創元社、一九四〇年）。フュステル・ド・クーランジュ『フランス封建制度起原論』明比達朗訳（御茶の水書房、一九五六年）。クーランジュ『古代都市』田辺貞之助訳（白水社、一九六一年）。
- (2) デュルケームは、「一つの慣行とか制度、あるいは一つの法律の規則とか道徳上の規則を本当によく理解するためには、できるだけその最初の起源にまで遡ってみることが必要である」（『デュルケーム家族論集』小関藤一郎訳編、川島書店、一九七二年、三一頁）とか、「社会制度がもつ、その将来発展すべき方向、生成の過程においてあらわす力は、その根源である最初の萌芽の性質に緊密に依存している。……教育制度の発展の仕方および生成の帰結を理解するには、もつとも遠い起源まで遡ることをいってほならない」（デュルケーム『フランス教育思想史』小関藤一郎訳、行路社、一九八一年、四九〜五〇頁）と主張している。
- (3) 前稿とは、渡邊和行「歴史家の誕生——修行時代のガブリエル・モノー——」『香川法学』第六卷第三号（一九八六年）のことである。
- (4) ここで「制度化」というタームの定義をしておきたい。「制度化」とは、第一に「人々が当該活動の社会的機能の重要性を評価し、これを受けいれている」こと（主観的側面）、第二に「当該活動が職業的役割として社会制度のなかに組みこまれていて、その従事者はそのなかで報酬を得て生活ができる」こと（客観的側面）を意味している。この定義は、富永健一『人類の知的遺産』79 現

代の社会科学者』（講談社、一九八四年）六一〜六二頁からの引用であるが、J・ベン＝デービッド『科学の社会学』潮木・天野訳（至誠堂、一九七四年）九九頁の定義より、簡潔明瞭であると筆者には思われる。

- (5) ホブズボームの指摘にもあるように、社会史が何であるかについては議論もあることであろうが、筆者は以下のような特徴をもつたものと理解している。第一に、事実に対する貪欲な探求である。学際的方法によって記述資料以外の資料を発掘し、有意味な事実を引きだす積極的な態度である。いわば事実観のコペルニクスの転回である。第二に、総合的視点によってこれらの事実を位置づけ、歴史の全体像を構築せんとする方法的態度である。このためには仮説を必要とする。このような社会史研究がめざしているものは、「社会的結合関係」・「国民統合と対抗社会」・「マイノリティへの眼ざし」という象徴的用語によって、その特色を知ることができるとであろう。二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』（木鐸社、一九八六年）、E. J. Hobsbawm, "From Social History to the History of Society," in M. W. Flinn and T. C. Smout eds., *Essays in Social History* (Oxford, 1974). を参照のこと。

- (6) カミーユ・ジュリアン『近世佛蘭西史学概観』讀井鉄男訳（白水社、一九四一年）一四九頁。
- (7) Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire* (Paris, 1953), p. 423. 長谷川輝夫訳『歴史のための闘い』（創文社、一九七七年）一三四頁。

- (8) プレハローフ『歴史における個人の役割』木原正雄訳（岩波文庫、一九五八年）三七頁。

- (9) Christian Pfister, "Gabriel Monod," *Revue historique*, CX (1912), xxiv. 以下、R. H. と略記する。

- (10) 佐々木力『科学革命の歴史構造 上』（岩波書店、一九八五年）第三章。ベン＝デービッド、前掲書、第六章。

- (11) チャールトンとは、①社会学的実証主義、②宗教的実証主義、③コントの全思想体系、④哲学的実証主義を区別している。D. G. Charlton, *Positivist Thought in France during the Second Empire 1852-1870* (Oxford, 1959), p. 5. J・S・ミルは、「実証的」という言葉を「客観的側面からすれば現象的、主観的側面からすれば経験的」と言いかえることと、語意の「曖昧さを減らすこと」ができる」と指摘している。J・S・ミル『コントと実証主義』村井久二訳（木鐸社、一九七八年）一六頁。

- (12) 以下の語義については、Charles-Olivier Carbonell, *Histoire et historiens, une mutation idéologique des historiens français 1865-1885* (Toulouse, 1976), pp. 401-408.

- (13) Carbonell, "La naissance de la Revue historique 1876-1885," R. H., CCLV (1976), 335. Guy Bourdè et Hervé Martin, *Les écoles historiques* (Paris, 1983), p. 137.

- (14) Gabriel Monod, "Observations de M. Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXI (1896), 546.

- (15) この時代の(自然)科学信仰を示す好個の事例として、哲学者ブレンターノの言葉は引用に値する。かれは一八六六年に、「哲学の真の方法は自然科学の方法にほかならない」と断言したのである。『世界の名著 51 ブレンターノ、フッサール』(中央公論社、一九七〇年)細谷恒夫解説、一二頁。
- (16) アンリ・セーも批判するように、実際のコントは、歴史を重視したとはいえ、歴史は普遍から特殊へ進むべきであると考えていた。歴史は事実の収集から始まるというのが、セーの立場であった。Henri Sée, *Science et philosophie de l'histoire*, 2^e éd. (Paris, 1933), pp. 79-80.
- (17) クローチュ『歴史の理論と歴史』羽仁五郎訳(岩波文庫、一九五三年)三四六〜三七〇頁。ベルンハイム『歴史とは何ぞや』坂口・小野訳(岩波文庫、一九六六年)四五〜四九頁。コリングウッド『歴史の観念』小松・三浦訳(紀伊國屋書店、一九七〇年)一三四〜一四一頁。マンハイム『歴史主義』徳永恂訳(未来社、一九七〇年)九〇頁。C・アントーニ『歴史主義』新井慎一訳(創文社、一九七三年)一四〇〜一四二、一八〇頁。W・H・ウォルシュ『歴史哲学』神山四郎訳(創文社、一九七八年)一九五〜一九八頁。
- (18) William R. Keylor, *Academy and Community: The Foundation of the French Historical Profession* (Cambridge, 1975), pp. 8-10.
- (19) Carbonell, *Histoire et historiens*, p. 407.
- (20) Charlton, *op. cit.*, chs. IV, VI-VII. なおJ・S・ミルもリトルを、コントの「弟子たることを自任している人々のうちで」どの点からみても最も卓越した人物」とか、「コント氏の誤謬から脱却している唯一の人物」と評価している(J・S・ミル、前掲書、九、八七頁)。
- (21) Charles Seignobos, "Les conditions psychologiques de la connaissance en histoire," *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, XXIV (1887), 1-32, 168-179. Do., *La méthode historique appliquée aux sciences sociales* (Paris, 1901). R. Fawtier éd., "La dernière lettre de Charles Seignobos à Ferdinand Lot," *R. H.*, CCX (1953), 1-12. Martin Siegel, "Henri Berr's *Revue de synthèse historique*," *History and Theory*, XI (1970), 329-330.
- (22) 渡邊和行、前掲論文、一九頁。なお前掲の富永健一『現代の社会科学者』は、「実証主義史学について触れるところはないが、「実証主義」対「理念主義」という枠組によって実証主義潮流の整理を試みており、有益な文献といえる。そのなかで氏は、一九世紀のサン＝シモンやコント、J・S・ミルらの古典的実証主義から二十世紀の論理実証主義を経た新実証主義への展開を鳥瞰され

ている。

二 普仏戦争の衝撃と歴史学

モノーの弟子の一人であるクリスチャン・フィステルは、『史学雑誌』の五〇年記念論集において、一八七〇年前後のフランスの歴史研究の状況について述べている。⁽¹⁾この一文に依拠して、この時期のフランスに歴史学の革新が不可欠であった状況を浮きぼりにしよう。

この時期のフランスでは、歴史学は二つの教育機関で教えられていた。高等師範学校と古文書学院である。しかし両校の教育は、ともに不十分なものであった。古文書学院の教育は非常に専門的で、しかも中世に限定されていた。この時期の古文書学院では、あらゆる一般化は禁じられたままであり、いきおい研究も瑣事に埋没したものとなることは必定である。古文書学院はなによりも、古文書学者と古文書保管人の養成を目的としていたのである。これに対して、高等師範の歴史教育は一般的であり、最終学年の三年になって一級教員資格試験のために、歴史と地理を大急ぎで学ぶというありさまであった。この試験のための授業計画もなかったし、高等師範の初めの二年間は、学士号の準備にあてられていたのであるが、そこでは歴史学は締めだされていたのである。高等師範は、教授の養成を目的としていたが、歴史研究者はそこには含まれていなかったといつてよい。つまり両校ともに、歴史家を系統的に養成する制度や機関は不在であり、まったくの偶然による以外に、フランスでは歴史家は生みだされなかったのである。このような状況が、モノーが歴史研究の道にはいつたときの状況であった。

この状況を大きく展開させたのが、普仏戦争である。旧稿においても指摘したように、実証主義史学の成立に、普仏戦争の敗北は大きなインパクトを与えた。⁽²⁾ 敗戦の結果は、フランス諸学の、とりわけ歴史研究の大いなる発達であった。⁽³⁾ ランケ史学の成立にドイツ・ナショナリズムが大きく寄与したように、実証主義史学の確立にもフランス・ナショナリズムが貢献したのである。ただし、一九世紀前半のナショナリズムが、非合理的で想像力に富むロマン主義に色どられていたのに対して、一八七〇年代のナショナリズムは、合理的な科学主義に支えられていた点にその特色が見られる。論点をさきどりして述べるなら、この差異は、のちの仏独両国の歴史学の展開を規定する因子として重要である。なぜならドイツの歴史学が、歴史主義という思想によって歴史個体にアプローチし、個別的事実を発見し理解するという道をたどったのに対して、フランスの歴史学は、実証科学の精神によって導かれ事実の確定をめざしたからである。堅実な考証という技術をフランスがドイツから学んだとしても、フランス歴史学が独自の道を歩んだのもここに起因するのである。すなわち事実の認識を基礎づける哲学が異なっているのである。

ともあれ普仏戦争におけるドイツの勝利によって、フランス諸学の活性化を望む声は、一層強まったのである。ドイツから科学的刺激をうけたフランスは、学問の遅れを取りもどすべく努めた。フランス諸学の活性化は、以下の諸事実に示されている。第一に、知的生産の指標ともいえる出版件数が、一八七一年の七四四五点から一八七五年の一四一九五点へと増した⁽⁵⁾ことである(約四〇〇〇の定期刊行物を除く)。第二に、一八七二年から一八八〇年の間に、多くの学術雑誌が創刊されていることである。『ロマニア』・『史学雑誌』・『文献学雑誌 Revue de philologie』・『地理学評論 Revue de géographie』・『哲学雑誌 Revue philosophique』などが代表的なものである。⁽⁶⁾ 学問研究の発達と専門雑誌との関係については前稿で触れたが、これらの雑誌は殆どがドイツから知的刺激をうけ、範をドイツに仰いだといつてよい。

このように敗戦は、フランス諸学の復興の契機となったのである。そのなかでも歴史学は、とくに重視された。敗戦はフランスを二つの方向にいざない、この二方向は期せずして歴史学の革新に向かつて収束していったからである。第一の方向は敗因を究明することであり、フランスの過去の総点検がなされた。第二の方向は敗北という傷口の手当をすることであり、フランスの過去の栄光に光があてられた。二方向ともに、歴史的アプローチを必要としたのである。

第一の敗因の究明は、以下のプロセスをたどって歴史学の科学化をもたらすことになる。フランスの敗因は、外にではなくて内に求められた。「われわれは敗北の原因をわれわれの内部にもついていた」という文部大臣ジュール・シモンの言葉は、左右を問わず、当時の知識人の共通認識となっていた。⁽⁷⁾ 排外主義に眼を曇らされていない知識人にとって、フランスの敗北はフランスの知性の敗北、とりわけ教育制度の敗北であると理解されたのである。⁽⁸⁾ 普仏戦争に勝利したのはドイツの大学であるというルナンの言葉が、それを象徴的に物語っている。⁽⁹⁾ エミール・ゾラもドイツの「科学的精神こそが、われわれを打ち破ったのである」と述べている。⁽¹⁰⁾ 敗戦というクルティウスの亀裂が、フランス諸学の危機的状況を満天下に晒け出したのである。つまり学問の危機とは、学問が生に対する有意義性を喪失したことにほかならないのである。それだけ危機は、深かったのである。敗因が高等教育の立ち遅れにある以上、そこから導出される結論は明白であろう。ドイツに進んだ知識を求め、フランスの教育制度を改革することであった。敗戦国が軍事的勝利に決定的役割を演じたと考えられる戦勝国の進んだ諸制度をとりいれることは、いわば歴史的公理である。それにしてもかつての文化大国フランスが、宿敵ドイツに学ぼうという態度を示したことは先例のない事態であった。ラヴィスやセーニョボスが七〇年代に、ドイツ史の研究やドイツの教育制度の視察に赴いたのも、ドイツに学びドイツの強大さの理由を探るといふ国策的動機があったのである。かくして敗因の究明は、学制改革と結合することとな

った。教育制度の改革の一環として、歴史学の革新も位置づけられることになる。それは歴史学を、哲学や文学から独立した学科目とする努力として表わされた。このためにはデカルトによって否認された歴史学を、科学として措定する必要があつたのである。かくして歴史学を独立科学として制度化するための認識論的切断こそ、若き歴史家の尽力すべき目標となつたのである。歴史学内部から、科学性の追求という認識論的要求が自生してくる。歴史学の科学性を担保するものとして、方法論の科学性が重視されるにいたる。ドイツの歴史学方法論は、歴史学が科学たるゆえんを証明する武器と考えられたのである。

第二の方向も、歴史学の發達に貢献した。敗戦は「フランス社会にひどい混乱」⁽¹¹⁾をもたらし、モノーは「救済と再生はどこから来るのかを自問して、息苦しいほどの不安に陥つた」と告白している。敗戦の結果は『フランスの内乱』(マルクス)であり、アルザスとロレーヌ両県の喪失であつた。フランス領のドイツへの割譲は、「国民とは何か」(ルナン)ということを再考させる機会となつたのである。⁽¹²⁾「国民」の再定義には、当然、歴史が動員されるはずである。このようにフランスの精神的な「救済と再生」の道の一つが、歴史学に求められたのであつた。歴史学は、敗戦という精神的外傷を癒す特效薬として重宝がられたのである。すなわち、敗戦という現在の恥辱を過去の共和主義的栄光によって慰撫し、国民に矜恃を取りもどさせることが、歴史学に要請されたのである。⁽¹³⁾歴史学は、意気阻喪した国民に一体感と和合をもたらし、愛国的な国民感情の涵養に役立てられんとしたのである。一九世紀において、歴史学も含めた科学の制度化にナショナリズムが大きく関与していたことは、つとに指摘されているところである。⁽¹⁴⁾モノーも率直に宣言している。「われわれの主要任務であるフランスの過去の研究は、今日、国民的重要性をもつにいたつた。この研究によってこそ、われわれはわが国が必要とする精神的統一と精神的な力とを、わが国に与えるのである。」⁽¹⁵⁾ラヴィスも、フランスの文化的矜恃への恒久的損傷を何よりも危惧していた。それは次のような不満となって吐露さ

れるのである。かつては偉大な科学的発見をなしたフランスが、今やドイツの後塵を拝する国に転落しているというのに、フランスの過去の知的栄光を取りもどす手段について、まったく論じられていないと⁽¹⁶⁾。つまり傷口の手当のための方箋は愛国的かつ共和主義的な国民精神の作興であり、この点でもドイツの大学がモデルとなったのである。というのは、ドイツの「大学教育が国民精神を發展させ」、歴史家がドイツ国民の精神的統一に貢献していたからである⁽¹⁷⁾。

このように歴史学の地位向上を願う歴史家の考えと、共和主義的な国民作興を計らんとする政治家の考えとが一致したのである。共和政と歴史学との同盟が成立する⁽¹⁸⁾。民主主義と科学との同盟と言いかえてもよいであろう。民主主義と結合した科学の概念を提唱していたのは、『史学雑誌』の協力者でもあったエミール・リトレである⁽¹⁹⁾。かくして歴史学の革新に、すなわち実証主義史学の制度化に有利な環境が築かれつつあったのである。とはいえ歴史学の革新が、スムーズに進捗したのではないことに注意すべきである。例えば高等師範でも、何らかの改革の必要性についてのコンセンサスはあったが、普仏戦争後、校長に任命されたピエール・E・ベルソーのように、ドイツの影響にくつわを⁽²⁰⁾はめ、一般教養的教育を擁護する人物がいたからである。

(1) Christian Pfister, "Le cinquanteaire de la Revue historique," in *Histoire et historiens depuis cinquante ans, méthodes, organisation et résultats du travail historique de 1876 à 1926*, t. I (Paris, 1927), vii-x. なおフィステルは「一九一九年から二六年までストラスブール大学の文学部長を務め、二七年から三一年まで学長でもあった。このストラスブール大学は過去の経緯からして、フランス・アカデミズムの「ショーウィンドー」として位置づけられた重要な大学であった。モノーの弟子のフィステルが、アナール学派の第一世代たるリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックの同僚であった事実は、フェーヴルと実証主義史家との関係に新たな光を投ずるものとして興味深い。かれらの人事に誰の推薦があったのか不明であるが、少くとも同じ歴史家であ

る学部長フイステルが関与しないはずがないと考えられるのである。この意味からも、アナール学派の第一世代と実証主義史家との隔たりは、今日、想像されるより狭かったと言いうるであろう。

- (2) 渡邊和行「フランス実証主義史学成立の背景」『香川法学』第五巻第四号（一九八六年）五五～五八頁。Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 459-478.
- (3) 一八八九年にモノーが著わしたフランスの歴史研究についてのサーヴェイを参照のこと。モノーはこのなかで、研究組織・学会・政府の活動・雑誌などの制度面から、普仏戦争以降の歴史研究の飛躍を物語っている。Monod, "Les études historiques en France," *Revue internationale de l'enseignement*, XVIII (1889), 587-599.
- (4) 蛇足ながらマックス・ウェーバーのランケ評価を紹介しておこう。ウェーバーは「ランケに見事なかたちで見られるような、真の芸術家の仕事というものは、よく知られた事実をよく知られた観点に関係づけながら、しかもある新しいものを創造することができる」というかたちで発揮されるものなのである」とランケを讃えている。ウェーバー「社会科学および社会政策的認識の〈客観性〉」徳永恂訳『現代社会学大系 5 ウェーバー社会学論集』（青木書店、一九七一年）所収、七七頁。
- (5) Charles Louandre, "Les études historiques en France depuis la guerre," *Revue des Deux Mondes*, t. 19 (15 janvier 1877), 428. このようなタイトルの論文の出現は、この時期の歴史研究の盛況を雄弁に物語っている。もっとも『史学雑誌』とモノーについては、触れるところはない。
- (6) Claude Digeon, *La crise allemande de la pensée française 1870-1914* (Paris, 1959), pp. 372-373.
- (7) *Ibid.*, pp. 78-79, cf. M. Droz, *Les relations intellectuelles franco-allemandes de 1871 à 1914* (Paris, 1967), pp. 1-8.
- (8) 七〇年後に、マルク・ブロックが同様の結論を下したことは興味深いことである。マルク・ブロック『奇妙な敗北』井上幸治訳（東京大学出版会、一九七〇年）二一七～二三三頁。Lucien Febvre, *op. cit.*, p. 406, 邦訳、一二五頁。
- (9) ルナンはすでに一八六〇年代から、ドイツの大学の知的卓越性との比較で、フランスの高等教育の改革について提言している。Ernest Renan, "L'instruction supérieure en France, son histoire et son avenir," *Revue des Deux Mondes* (mai 1864), 73-95.
- (10) Digeon, *op. cit.*, p. 273.
- (11) G. Monod, *Allemands et Français : souvenirs de campagne*, 2^e éd. (Paris, 1872), p. 140
- (12) Raoul Girardet, *Le nationalisme français 1871-1914* (Paris, 1983), pp. 62-69.
- (13) Jacques et Mona Ozouf, "Le thème du patriotisme dans les manuels primaires," *Mouvement social* (oct-déc. 1964), 5-32.

- Pierre Nora, "Ernest Lavissee, son rôle dans la formation du sentiment national," *R. H.*, CCXXVIII (1962), 73-106. Girardet, *op. cit.*, pp. 70-84. の目的のために地理学も動員された。「祖国と義務」を副題にもつ『二人の子供のフランス一周 Le Tour de la France par deux enfants』がベストセラーになったことに、それは示されている。磯部啓三『二人の子供のフランス一周』について『経済学部論集』（成蹊大学）第一五巻第二号（一九八五年）参照のこと。
- (14) 中岡哲郎「科学の制度化とナショナリズム」河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』（岩波書店、一九七七年）所収。
- (15) G. Monod et G. Fagniez, "Avant-propos," *R. H.*, I (1876), 4.
- (16) Ernest Lavissee, "La fondation de l'université de Berlin à propos de la réforme de l'enseignement supérieur en France," *Revue des Deux Mondes*, XLVI^e année, t. 15 (1876), 398-399.
- (17) Monod, *Allemands et Français*, p. 72. Keylor, *op. cit.*, pp. 42-43
- (18) なおこの時期の政治家および政治運動体に焦点をあつて教育改革の軌跡を論じた文献として、Katherine Auspitz, *The Radical Bourgeoisie: The Ligue de l'enseignement and the Origins of the Third Republic 1866-1885* (Cambridge, 1982). を参照。
- (19) Keylor, *op. cit.*, pp. 57-58.
- (20) Martin Siegel, "Clio at the Ecole Normale Supérieure: Historical Studies at an Elite Institution in France 1870-1904," *Storia della Storiografia* (August, 1985), 39. なお高野師範と第三共和政との関係については、Robert J. Smith, *The Ecole Normale Supérieure and the Third Republic* (New York, 1982).

三 歴史学の革新者モノー

前章で述べたように、普仏戦争とパリ・コミュンという激動をくぐりぬけるなかで、歴史学の革新にとって有利な状況が生まれつつあった。帝制期の文部大臣デュリュイによって先鞭がつけられた教育改革も、再び日程にのぼら

ざるをえない。モノーはそのデュリュイが創設した高等研究院で、歴史家の第一歩を印したところであった。モノーの関心は、歴史教育の改革よりもまず歴史研究の革新に向けられる。フランスで始められドイツで磨きあげられた考証の復活が、最初の仕事となった。考証の方法は、高等研究院のゼミナールを通して、徹底的に学生に教えられたのである。しかしモノーは、高等研究院の少人数の学生にだけではなくて、もっと広範な人々に「新しい歴史」を伝える手段を望んでいた。その希望が、『史学雑誌』となって実現したのである。

(一) 一八六〇年代の歴史学雑誌

『史学雑誌』の創刊は、モノーがフランスの歴史学に寄与した最大の功績であることに誰しも異論はないであろう。『史学雑誌』は歴史学全般にわたる最初の専門雑誌であり、実証主義史家の機関誌として、実証主義史学の制度化に大きな役割を演ずることになったからである。この『史学雑誌』が発刊されたのは、一八七六年の一月である。わずか一票差によつて第三共和政を産みだしたワロン修正法が可決されて、一年後のことであつた。『史学雑誌』は文字通り、第三共和政とともに成長していくのである。

モノーに専門雑誌の発刊を促す外因となつたヴァイツからの影響については、前稿において述べた。ここでは内因ともいふべき一八六〇年代に創刊されたフランスの専門雑誌を、モノーがいかに評価していたのかを『史学雑誌』の創刊にいたる前史として一瞥しておこう。なぜなら六〇年代に発刊された専門雑誌への不満が、モノーを新しい雑誌の刊行に駆りたてたからである。モノー自身、一八七六年に次のように語っている。「九年前、本誌と同じ意図をもつてある雑誌が創刊された。その雑誌とは、『歴史問題評論 Revue des Questions historiques』である。それが得た成功、それが生んだ幸運な結果、その購読からわれわれ自身を得た利益は、われわれがその雑誌を手本とするのに励ま

しとなった。しかし同時に『歴史問題評論』は、われわれが提起する理想からかなり遠ざかっており、その存在が本誌を無用の長物にしているとは思われない。⁽¹⁾このように『歴史問題評論』(以下、『評論』)は、反面教師として、『史学雑誌』の誕生に関与していたのである。しかも雑誌の体裁と構成の点では、両誌の間に直接的関係が見られるのである。フランスの『史学雑誌』はドイツの『史学雑誌』より『評論』を「手本」としたことが、カルボネルの調査で明らかとなっている。一八七六年まで、フランスの最重要な歴史学雑誌は『評論』であると言われるゆえんである。⁽²⁾

この『評論』が発刊された一八六六年には、『歴史・文学批評雑誌 Revue critique d'histoire et de littérature』(以下、『批評』)も創刊されている。⁽³⁾『評論』がカトリックの歴史家が中心となったのに対して、『批評』はドイツで歴史を学んできたG・パリスやシャルル・モレル、ポール・メイエルといった若い学者が編集にあたっていた。G・パリスは高等研究院でモノーの同僚となる文献学者であり、メイエルはモノーの下宿先のド・プレサンセ夫妻を通じて交際のあつたロマン語学者である。『批評』の協力者には、エルネスト・ルナンもいた。『批評』は書評を中心とした雑誌であり、科学的な歴史をめざして、史料に依拠しないフランスの歴史学を断罪し始めた。当時、好評を博していたフステル・ド・クラランジュの『古代都市』(一八六四年刊行)も、モレルによって批判の俎上にのせられたのである。モレルはフステルが、古代文明の一面と私法や公法概念を明確にしたことを認める。しかしモレルは、『古代都市』には誇張や牽強附会が見うけられ、逆に歴史的批判の跡はまったたくなく、ア・プリアリに歴史を構築せんとする人が常に失敗するように、フステルも失敗していると酷評したのである。⁽⁴⁾このような『批評』の舌鋒の鋭さは、セーニョボスの眼に「取り締まり police-operations」の実施と映ったほどであり、かれは「良心と方法を欠如している学者」への「公的膺懲」であると、その「取り締まり」を理解したのである。⁽⁵⁾この書評欄の衝撃は大であり、史実に基づく結論という方法を歴史家に自覚させることになる。カミーユ・ジュリアンも「史学が屢々その方法と目的を

忘却することがあると、一八六六年創刊の『批評』は断乎として史学にその方法と目的を想起せしめた」と記している。⁽⁶⁾ モノーも『批評』のこのような編集方針に異存はなく、一八六九年の後半に三本の書評を寄稿したのを皮切りに、七〇年一本、七二年九本、七三年一本、七四年九本と旺盛な書評活動を行っていた。⁽⁷⁾ その一方でモノーは、一八七三年には編集委員となり、雑誌編集のノウハウを学ぶことになるのである。⁽⁸⁾ 『史学雑誌』が書評を重視したのも、『批評』の影響といえるであろう。実際、『史学雑誌』のなかでモノーが健筆をふるったのは、論説の領域ではなくて書評の領域であったのである。⁽⁹⁾ しかし『批評』が週刊誌であり、毎号二〇頁をこえることもなく、従って論説も掲載されず、あまりに専門家を対象とした雑誌であったことは、モノーに不満の種を残したのである。

『批評』がドイツの歴史学方法論に依拠したとすれば、『評論』はドイツの考証を評価しつつも、フランスのベネデイクト派の考証に依拠した。『評論』は史料や証言の批判的取り扱いに基づく公正で客観的な歴史を唱道したが、その真意は、プロテスタントや合理主義者によって歪曲されたカトリック教会やフランス王国の歴史の書き直しにあった。『評論』はその方法において実証主義的方法を採り、歴史学の新しい潮流と合致するものをもつてはいたが、このようなイデオロギー性ゆえに、第三共和政の歴史家によってまったく無視されてきたのである。⁽¹⁰⁾ 『批評』はこのライヴアル誌を、『カトリックの見地から検討された歴史問題評論』と揶揄したが、その言葉のとおり、スダンの敗北後、『評論』は王党派的色彩を濃くし、セクトの機関誌に墮したのである。モノーも指摘している。『評論』は公平で科学的な研究をめざして創刊されたのではなくて、ある政治的宗教的思想の擁護のために創刊された。⁽¹¹⁾ かくして客観的で実証的で科学的な歴史をめざすという『評論』の創刊号の主張は、幻想となったのである。

(二) 『史学雑誌』の創刊

以上のように、ある党派的立場をもつ『評論』への批判と科学的ではあるがあまりに専門的な『批評』への不満は、モノーをして新しい雑誌の創刊へと駆りたてたのである。この批判と不満は、新しい雑誌の性格を規定した。それは厳密な科学的立場をとり、政治的宗教的立場から自由であり、雑誌に一般性をもたせることであつた。一八七五年の春、モノーと友人のリボーは、このような性格をもつ歴史と哲学の雑誌をそれぞれ出そうとして出版社を捜したのである。出版を引きうけたのは、ジェルメール・バイエール Germer-Baillière とモノーの親友でノルマリ안의フェリックス・アルカンであつた。⁽¹²⁾

かくして『史学雑誌』と『哲学雑誌』は、同時に誕生した。⁽¹³⁾ 創刊号の巻頭に、『史学雑誌』の綱領的文書が掲載されている。モノーとかれの教え子のファニエ⁽¹⁴⁾の連名による「緒言」と、モノーの手になる「一六世紀以降のフランスにおける歴史研究の進歩について」（以下、「進歩」と略記）がそれである。本論のなかでたびたび引用してきたこれら二つの文書は、いわば『史学雑誌』のプログラムないしマニフェストである（今後この二文書からの引用は、*Avant-propos, Du progrès* と略記し、そのページ数を本文中に明記しておくことにする）。これらの二文書を手掛りにして、われわれは『史学雑誌』の目的や性格、およびこの雑誌を鼓舞する精神について知ることができる。とりわけ「進歩」は、モノーがそれ以前のフランス史学の歩みをいかに総括したのかを知るうえでも重要な論攷といえる。『史学雑誌』の発刊は「わが国の歴史研究の進歩に貢献する」（*Du progrès*, 5）と自負しているように、そこには『史学雑誌』を通じて、歴史学の革新を図らんとするモノーの熱意を感じることができるのである。

両文書を貫流しているライトモチーフは、二つある。一つは遺産を継承しつつ、フランスに科学的な歴史学を樹立することであり、他の一つは歴史学を愛国的共和主義的な国民統合の道具とすることであつた。前者のライトモチー

フは、モノーが仏独両国の歴史学を比較しつつ論を進めていることに見てとれるし、後者のそれは、本稿五〇ページの「緒言」の引用文や、次の文章に明らかである。「わが祖国に敵対的党派を生んできた痛ましい事件や、……近年、国民的統一を断ち切った事件は、……自国の歴史を深く知ることによって、国民の魂のなかに国民意識を目覚めさせることを、われわれの義務とした。……このことによってこそ、すべてのフランス人は同じ土から萌えてた新芽であり、同じ民族の子供であり、父祖の遺産をどうも否認せず、旧フランスの息子であると同時に近代フランスの市民であることを互いに実感するのである。」(Du progrès, 38) 分裂した国民の間に和合をもたらずという後者のライトモチーフは、等三共和政が誕生したばかりという時代状況に拘束されたものであろうが、この時代の知識人に共有されていた主調音でもある⁽¹⁵⁾。第三共和政が危機を迎える直前の一九二九年に創刊された『経済社会史年報』の序文と比較するとき、歴史学の政治的社会的機能を率直に述べる『史学雑誌』の特色が、一層、際だつのである⁽¹⁶⁾。

モノーは『史学雑誌』の目的を、以下の三つに求めている。第一に独創的で信頼しうる詳細な歴史研究の公表を奨励すること、第二に内外の研究動向や新しい業績について正確で豊富な情報を提供し、歴史家の間に絆や連帯感を創出すること、すなわち「結集と情報のセンター」としてすべての歴史家に役だてること、第三に歴史を職業としたい若人を良き方法によって養成し、またすでに歴史研究の道についている人には良き方法を維持させることである(Avant-propos, 1; Du progrès, 35)。そしてモノーは、「本誌は実証科学 science positive と自由な討論の論集であるが、事実の領野に閉じこもり政治的哲学的理論には距離をおく」(Du progrès, 36)と、その基本的立場を闡明するのである。

またモノーは、歴史家の態度として次のものをあげている。「歴史家の役割は、理解し説明することであり、称讃したり非難したりすることではない⁽¹⁷⁾。しかし「歴史家はある種の共感なしに過去を理解しえない」のである。だからと

いって「歴史家は、批評家と裁判官の権利を放棄してはならない。」（以上 Du Progrès, 37）¹⁷に見られるのは、「科学的公正さ」・「過去への共感」・「精神の独立」といったランケやミシュレに接続する類の歴史観である。

つまり政治的宗教的目的のために歴史を利用することを峻拒するモノーは、その政治傾向がなんであれ、科学が要求する方法と厳格な批判と公正な態度で問題を取り扱うことを歴史家に求めたのである。史料からの引用を義務づけさせてさえるのも、そのためである（Avant-propos, 2）。すなわち客観的で公正な態度と科学的な説明方法に基づく歴史叙述こそが、『史学雑誌』の編集方針であったのである。『史学雑誌』の表紙に印刷されたキケロの言葉、「歴史はいかなる虚偽をも言うことを敢えてすべからず、いかなる真実をも言うことを敢えてすべし」は、モノーの精神を最もよく表わしているであろう。ともあれこのような『史学雑誌』の立場は、一七年前に、ドイツの『史学雑誌』の創刊号で主張されていた立場でもあった。¹⁸

モノーはより広範な層に、新しい歴史を広めるためにも努力している。かれは『史学雑誌』は三九五年から一八一五年までのヨーロッパ史を中心とするが、『古文書学院論集 Bibliothèque de l'École des Chartes』や『考古学雑誌 Revue archéologique』などの古代史や中世史といった領域別の専門誌をめざすのではなくて、より広範な読者を対象とする歴史全般 *histoire générale* を論ずる学術雑誌をめざすと宣言したのである。そのことは三世代にまたがる五三名の協力者の多彩な顔ぶれに看取しうるであろう。リトレ、キシュラ、デュリュイラの世紀初めに生まれた世代、フュステル・ド・クーランジュ、テーヌ、ルナンら一八二〇年代の世代、そしてラヴィス、A・ソレル、アルフレッド・ランボー、G・パリス、メイエル、ラ・ブラーシュら一八四〇年代の世代である。人と年齢と思想の多様性の背後に、共通の特色があることを看過すべきではない。ニュアンスはあれ、皆、「実証科学」としての歴史学を追求したこと、五三名の歴史家の大多数が専門的な訓練を受けた歴史家であったことである。五三名の主な内訳は、教授三一人（高

等教育機関二四名、中等教育機関二名、視学三名など」と、古文書保管人一二人、司書七人である⁽¹⁹⁾。しかもこれら歴史家の殆どが、高等師範と古文書学院の出身者であったことは、『史学雑誌』の編集方針の具現として重要である。高等研究院と同じく、『史学雑誌』も、「高等師範の精神と古文書学院の精神の融合⁽²⁰⁾」として位置づけられたのである。すなわち「古文書学院の厳正な批判と考証の精神および高等師範の文学的で全体的な精神との結合⁽²¹⁾」である。それは編集者の構成にも明らかである。モノーはノルマリアンであり、フアニエはシャルティストであった。フアニエに代わったベモンもシャルティストであり、『史学雑誌』は両校の良い面を生かすように配慮されていた。つまり両校の方法的総合によって、「全体の輪郭と肝要な細部⁽²²⁾」というパースペクティブが保証されるのである。

ところでモノーが、歴史対象に向かう客観性と方法的な科学性とを要求した背後には、歴史研究においてフランスはかつての異論のない優秀さを喪失したという現状認識があった。従って『史学雑誌』を創刊して、誠実な歴史研究者を鼓舞激励し、フランス史学の復権を図る必要があると考えたのである。このような展望 *perspective* をモノーが得たのは、フランス史学の過去を振り返り *retrospective*、フランス史学の未来を思索した *prospective* からにほかならない。一つの科学を生み出すためには、反省的思考を方法的に用いる必要があるのである。この思索の産物が「進歩」であった。歴史研究の分野において、フランスはなぜドイツの後塵を拝することになったのか。この問題を解明することは、「進歩」に託された。一六世紀以降のフランス史学⁽²³⁾の進展を反省的に総括するなかから、フランス史学の長所も短所も剔抉されたのである。

それではモノーの説明に耳を傾けよう。中世には歴史研究や歴史批判は存在せず、学問としての歴史は、現在とは異なる過去への新しい関心を喚起したルネサンスに始まる。「歴史感覚が発達するためには、過去は現在から截然と区別され、しかも過去は客観的見地から年月を隔てて研究されねばならない」(Du progrès, 8) からである。ついで歴

史研究に新たな躍動を与えたのは、宗教改革であった。ルターに始まる「神学批判は、歴史批判の出発点であり源であった」(Du progrès, 10)のである。こうして一六世紀後半に、フランスにも歴史への知的好奇心が生まれたのである。ジャン・ボダンがその代表である。しかし政治的情熱の横溢や公刊史料の乏しき、補助科学の未発達という否定的状況ゆえに、「この時期の歴史家は「土台を築く前に建物をたてんとした」(Du progrès, 14.)のであった。他方、同時期のドイツは、中世史家による八大論集が公刊され、のちの歴史研究の条件作りに貢献していた。しかしフランスも一七世紀に、この遅れをとりもどす。イエズス派・オラトリオ会・ジャンセニスト・ベネディクト派の修道士が、考証の土台を築いたからである。学問としての歴史はこれ以降、大別して二つの流れにのって「歴史の世紀」(Du progrès, 27)である一九世紀に朝宗してゆくことになる。一つは教会内部で練磨されてきた考証の伝統であり、「教会科学 la science ecclésiastique」⁽²⁴⁾ 他の一つは啓蒙哲学者によって企図された事実と一般的観念との結合である。「世俗科学 la science laïque」⁽²⁵⁾。こうして「歴史はあらゆる科学の基礎・中心・目的として現われた。あらゆる科学は歴史に仕え、そして歴史の本質と真の利益であるもの、すなわち人類と文明の発達を明らかにするのに寄与すべきであった。」(Du progrès, 25.) 歴史の本質が「人類と文明の発達」にあるというこのような思想は、「歴史は祖国の崇高さと人類の進歩に精励する」(Du progrès, 38.)⁽²⁶⁾ことを説く発言とならんで、一九世紀の樂觀的な進歩信仰の特色である。モノーの要約を続けよう。フランス革命と第一帝制は、歴史研究を禁じた。歴史研究の飛躍は、ブルボン王朝の復辟を待たねばならない。周知のように一九世紀に歴史研究の発達を促したのは、ロマン主義の思潮⁽²⁵⁾と実証科学の発展である。ロマン主義は過去を現前させ、実証科学は科学的認識の方法を歴史家に与えたからである。具体的には補助科学（文献学・人類学・地質学・古銭学・碑銘学・古文書学・外交論）の活用と、テキストの批判である。このようにモノーは、一九世紀前半の歴史学の到達段階を確認してから、フランスとドイツの比較に移るのである。

一九世紀の歴史研究におけるドイツの優越は、ドイツ人の才能や忍耐強い考証にも負っているが、「とりわけ大学の強力な機構に負っている」(Du progrès, 27)ことをモノーは指摘する。フランスと異なりドイツでは、高等教育は時代の必要に応じて修正され、維持され、科学的伝統や批判や方法を重視する習慣は、大学のなかで形成された。ドイツは「広大な歴史研究所」(Du progrès, 28)にたとえられ、そこから生みだされる業績には瞠目すべきものがある。現在のドイツの科学には、その瑣末主義や冗漫さを非難しうるが、本来、ドイツの科学は一般的観念をもっていた。しかも「それは科学的特徴をもった一般的観念である。すなわち、ゆつくりと厳密に確立された事実の一般化、ないし既知の事実を説明し、そしてなお曖昧な事実の探究に役立つ仮説である。歴史学が真に科学の名に値し、堅固な土台を打ち立て、ある進歩を実現しえたのは、これら一般的観念のおかげである。ドイツほど歴史研究に科学的厳密性を付与することに貢献した国はない。」(Du progrès, 29)ここに展開されたモノーの思想が、本来の意味での実証主義であることに何人も異論はないであろう。⁽²⁶⁾

それでは、フランスの歴史学の欠陥はどこにあるのであろうか。モノーは、次の二つの理由を指摘している。第一に、フランス人の国民性という気質的な理由である。それは、自発性に富むが、せっかちで、想像力と芸術の誘惑に負けやすい気質である。第二に、有効な高等教育の欠如という制度的な理由である。このため一般的な科学的訓練をうけることもなく、共同研究という習慣もない。従って一九世紀前半の歴史家とは、殆どが独学者であり、師をもたず、弟子も養成しない。かれらは考証家ではあるが、学者というより文学者であった。このような科学的伝統の欠如と統一的系統的な指導の欠如に、政治的宗教的熱情が加わった。テイエリーもギゾーもミシュレもテイエールも皆、然りである。しかしモノーは、かれらの歴史を一方的に断罪したのではない。「フランスの最も著名な歴史家の欠点が何であれ、かれらは巨大な仕事をした」ことを、モノーは知っているからである。モノーは、かれらが「過去を蘇生

させ、……古人の魂に深くはいりこんでいる」ことを承認するのである(以上、Du progrès, 30)。一九世紀前半のフランス史学のこの点を、モノーは継承したのである。

ところで当時のフランスにも、考証の伝統を墨守している人々がいた。ベネディクト派の仕事を継受した碑銘文学アカデミーや、一八二一年に創設された古文書学院、それに史料集を公刊したギゾーである。

しかしモノーの見地では、「フランスの歴史学が苦しんできた最大の不幸は、文学と考証の乖離ないし対立である。」(Du progrès, 32)多くの教養人は考証研究を軽蔑し、想像力や哲学がすべてに代位しようと信じた。他方、考証家は文学的形式や一般的観念に理不尽な嫌悪を示し、無益な事実の詳細に逃避したのである。このような対立を凌駕せんとしたのは、A・ティエリーであり、ミシュレであり、ギゾーであった。しかしこれらの著名な歴史家といえども、「よく組織された高等教育の欠如がもたらす致命的結果を防遏しえなかつたのである。」(Du progrès, 33)

以上のように歴史の「発見と最初の探検の時代」(Du progrès, 34)であった一六世紀から一九世紀前半のフランス史学を概観したモノーは、今日、状況は歴史学にとって良好であることを述べて、先述した『史学雑誌』の目的や意図および方法を語ったのである。非常に巧みなサーヴェイであるがゆえに、さらにわが国ではフランス史学の歩みに関心が薄いがゆえに、われわれはやや詳しくモノーの「進歩」を読んできた。このなかに表現された思想と方法をもつ『史学雑誌』は、たちまちフランス歴史学の主流となり、これ以後、創刊される歴史学雑誌に大きな影響を及ぼすことになるのである。『宗教史学 Revue de l'histoire des religions』(一八八〇年)、『政治経済学雑誌 Revue d'économie politique』(一八八七年)、『外交史評論 Revue d'histoire diplomatique』(一八八七年)などの雑誌は、なんらかの形で『史学雑誌』の影響下に発刊されたものである。⁽²⁷⁾ 少くとも『社会学年報』(一八九八年)、『近現代史評論』(一八九九年)、『歴史総合評論』(一九〇〇年)といった新しい雑誌の出現によって、『史学雑誌』が自己の性格の再定義や歴

史の方法の再吟味に迫られるまで、『史学雑誌』はフランス歴史学の金字塔として聳立していたのである。

ともあれ「進歩」を執筆したことによって、モノーはフランス歴史学の課題をよりよく認識したことであろう。「進歩」の総括から導出される結論は、高等師範と古文書学院の方法論的な揚棄、すなわち文学と考証の総合という主張であり、よく組織された高等教育の必要性の主張であった。これがモノーの歴史観のエッセンスであり、実践的なポリシーであった。モノーの後半生は、これらの仕事に注がれるのである。モノーは三二歳のときに執筆した『史学雑誌』のマニフェストに、「生涯、忠実であることであろう。

(1) G. Monod, "Du progrès des études historiques en France depuis le XVII^e siècle," *R. H.*, I (1876), 36. 以下 'Du progrès et略記する。

(2) Carbonell, *Histoire et historiens*, p. 326, p. 412.

(3) 以下の引用は 'Keylor, *op. cit.*, pp. 29-33, Carbonell, *Histoire et historiens*, pp. 325-399. Do., "La naissance de la Revue historique 1876-1885," *op. cit.*, 332-337, Martin Siegel, "Gabriel Monod and the Ideological Foundations of the Revue historique," *Studia Methodologicae*, IX (1972), 5-8.

(4) *Revue critique d'histoire et de littérature*, No. 15 (14 avril 1866), 233-238., No. 16 (21 avril 1866), 252-258. 以下 'Revue critique と略記する。モレルのこの書評に対するフュステルの反論が、Fustel de Coulanges, "Correspondance," *Revue critique* (1866) 373-377. である。モレルに参考文献の不十分さを指摘されたフュステルは、「私はライン川の近くに住んでいるが、少くとも左岸のほうである。私はフランス的方法で、すなわち簡潔かつ明晰に執筆したい。……私も考証を愛するが、みせかけやひけらかしの考証を好まない」と応酬したのである (*Ibid.*, 377.)。

(5) Ch. Langlois and Ch. Seignobos, *Introduction to the Study of History* (New York, 1898), pp. 137-138. 高橋巳寿衛訳『歴史学入門』(人文閣、一九四二年)一三二頁。

(6) カミーユ・ジュリアン、前掲書、一八八〜一八九頁。

(7) 以上の数字は、『批評』の一八六六年から一八七五年の目次をもとに筆者が調査した数字である。

- (8) Ch. Bémont, "Gabriel Monod," *R. H.*, CX (1912), vii. 一八七二年に「文献学雑誌『ロマニア』を創刊したメイエルに代わり、モノーが編集委員になったのである (Benjamin Harrison, *Gabriel Monod and the Professionalization of History in France, 1844-1912*, the University of Wisconsin, Ph. D. 1972, pp. 201-202.)。モノーは『批評』の編集委員を一八八八年まで続けているが、『史学雑誌』の創刊とともに、実質的な仕事はしなくなる (Alice Gérard, "Histoire et politique, la Revue historique face à l'histoire contemporaine 1885-1898," *R. H.*, CCLV, 1976, 356.)。
- (9) アナール学派の機関誌『経済社会史年報』も、書評を重視していたことを想起されたい。リュシアン・フェーヴルが『歴史のための闘い』を行なったのは、書評欄を通じてであった。
- (10) 『評論』と同時代人のカミーユ・ジュリアンとジュールジュ・ルフェーヴルは、史学史についての著書のなかで、『評論』に言及しているのは一回だけである。しかも雑誌名を単に記すのみという扱いであった。ジュリアン、前掲書、二一九頁。Georges Lefebvre, *La naissance de l'historiographie moderne* (Paris, 1971), p. 278.
- (11) Monod, *Du progrès*, 36.
- (12) Monod, "A nos lecteurs," *R. H.*, C (1909), 1, "Le cinquantième de la Revue historique," *R. H.*, CLI (1926), i.
- (13) 二つの雑誌の創刊号を比べると、『哲学雑誌』のほうが、H・スペンサー、J・S・ミル、W・ヴェント、テーヌ、L・リアールら著名な学者が多く寄稿している。*Revue philosophique de la France et de l'étranger*, I (1876). これに対して、『史学雑誌』には、ヴィクトール・デュリュイの名が目につく程度である。
- (14) 教え子といっても、ファニエはモノーより二歳年長であり、リセ・ルイール・グランでは一緒に学んだ仲であった。ファニエは高等研究院でモノーの第一期のゼミ生であり、『史学雑誌』の共同編集者であった。しかし一八八〇年以降、両者は政治的宗教的信条の相違によって袂別し、ドレフェス事件のときには、あい対立する陣営に属した。ファニエは最後には、『史学雑誌』が否定した『歴史問題評論』の協力者になつてゐる。Harrison, *op. cit.*, pp. 178, 207-208, Carbonell, *La naissance de la Revue historique*, 348.
- (15) フランス歴史学の復活を前にして、「フランスはドイツの対抗を恐れる必要はない」とか、「フランスの歴史学は敗れなかった」というコメントを『両世界評論』（一八七七年）に載せたルーアンドルの愛国的発言も、このような例である。Ch. Louandre, *op. cit.*, 429 et 453.
- (16) *Annales d'histoire économique et sociale*, I (15 janvier 1929), 1-2. 「読者へ」という序文のなかで、純学問的に歴史学の学際的

アプローチを強調していることが『年報』の特徴である。

- (17) 実証主義史学からアノール史学にいたるまでのフランス歴史学が、過去の「理解」だけでなく「説明」という視座をもつことは、「理解」という視座のみのドイツ歴史学と大きく異なる点である。(cf., Georg G. Iggers, *New Directions in European Historiography*, Middletown, 1975, p. 45. 中村・末川その他訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房、一九八六年、五七～五八頁)。デイルタイが打ちたたてた「理解」という精神諸学の方法原理に、ドイツの学生や研究者がいかにか呪縛されていたかを示す興味深いエピソードを紹介しておこう。ドイツにおいて、「理解」と同時に「説明」の重要性を主張したのは、歴史学から社会学へ転じたマックス・ウェーバーである。ウェーバーは名著『経済と社会』の劈頭で、「社会学とは、社会的行為を解明しつつ理解し、そうすることによって社会的行為の経過や結果を因果的に説明しようとするひとつの学問である」と定義したが(M・ウェーバー「社会学の基礎概念」濱島朗訳『現代社会学大系』5 ウェーバー『青木書店、一九七一年所収、八五頁)、この定義をめぐってエピソードは生じたのであった。エピソードの語り手は、タルコット・パーソンズである。一九二六年にハイデルベルク大学に留学していたパーソンズは、カール・マンハイムのゼミナールで、ウェーバーの社会学の定義に関する議論に参加する機会にめぐまれた。パーソンズは、参加者の多数が自然科学と文化科学の分離という思考に影響され、「解明しつつ理解すること」「因果的に説明することとは両立不可能であり、自然科学的実証主義の考えを表わす後者の語句は削除されるべきだと主張したことを回想しているのである(T・パーソンズ、富永健一「対談 社会システム理論の形成」『思想』六五七号、一九七九年、二〇～二二頁。富永健一、前掲書、四一～四二二頁)。
- (18) Sybel, "Vorwort," *Historische Zeitschrift*, I (1859), iii-v. もっともジーベルは、モノーほど明確に自己の歴史観を表白していない。ジーベルは「序」のなかで、学問性を尊び、政治的懸案を論じないことを記したのみである。
- (19) Carbonell, *Histoire et historiens*, p. 410.
- (20) R. H. CLI (1926), i.
- (21) Monod, "A nos lecteurs," R. H., C (1909), 1.
- (22) H・ノーマン『クリオの顔』大窪憲二編訳(岩波文庫、一九八六年)七八頁。
- (23) 一五～一六世紀のフランス史学の展開を論じた文献として、今日では、Donald R. Kelley, *Foundations of Modern Historical Scholarship: Language, Law, and History in the French Renaissance* (New York, 1970), x, 321 p. がある。
- (24) カッシーラーの先駆的業績をあげるまでもなく、啓蒙哲学が反歴史的・非歴史的ではなかったことに留意されたい。E・カッシー

ラー『啓蒙主義の哲学』中野好之訳（紀伊國屋書店、一九六二年）第五章。

(25) ロマン主義に関する近年の研究として、小野紀明『フランス・ロマン主義の政治思想』（木鐸社、一九八六年）がある。

(26) ここに見られるモノーの実証科学の精神は、デュルケームも共有しているものであった。デュルケーム『自殺論』宮島喬訳（中公文庫、一九八五年）九頁と比較されたい。

(27) Harrison, *op. cit.*, pp. 214-215. なお一八七六年以降、五〇年間のフランスの歴史学雑誌や歴史学会のサーヴェイとして、Louis Halphen, "France," in *Histoire et historiens depuis cinquante ans*, t. I, pp. 151-154. があるし、モノーもすでに一八八九年に同様のサーヴェイを行っている。Monod, "Les études historiques en France," *Revue internationale de l'enseignement*, XVIII (1889), 587-599.

四 歴史学の組織者モノー

前章で詳述したように、『史学雑誌』はフランス歴史学のフォーラムとして出発し、フランス歴史学の結節点としての機能をいかんなく発揮した。本章では専門雑誌以外の事柄で、モノーがフランス歴史学に貢献したことを列挙しよう。便宜的に研究者モノーと教育者モノーの二つに細分して論ずることにする。

まず研究者モノーについてである。フランス歴史学の基礎研究に挺身し、歴史学の確立に尽力したモノーにとって、個人的な歴史研究に充当しうる時間は乏しかった。かれは博士論文をまとめる余裕すらなかったのである。博士論文に発展するはずのユীগ・カペーの伝記も、ついに陽の目を見なかった。ただこのテーマについての史料研究を一八八五年に、『史学雑誌』に発表したのみであった。⁽¹⁾しかしモノーは、このときまでに歴史家としての確固たる地位を築

いていた。モノーのデビュー作は『メロヴィング朝史料に関する批判的研究』（一八七二年）であった。本書は、六世紀に『フランク人の歴史』を著わしたグレゴワール・ド・トゥールの生涯と諸著作の批判的研究を中心とした文献である。二〇頁ほどの序文のなかで、モノーは中世史の方法や中世史の史料の性質、および史料操作についての原理的説明を与えている。その神髄は、「史料の批判的な歴史研究は、……事実の批判にとって不可欠な前提である。これなくして歴史を叙述することは、不可能である⁽²⁾」に要約されるであろう。高等研究院における第一回ゼミナールの成果である本書は、⁽³⁾仏独両国の評者によって激賞された。R・ルースは、モノーがそれまでのフランスに欠けていた領域に光をあてたことを讃え、フランス中世史の史料全般について、同様の文献を与えてくれるようモノーに懇請したし、ドイツのアルントも、本書の功績はモノーのみに帰するものであり、本書はグレゴワール・ド・トゥール論の白眉であると、モノーを称揚したのである。⁽⁴⁾この後もモノーは中世史の史料研究に邁進し、一八八九年には『カロリング朝史料に関する批判的研究 *Etudes critiques sur les sources de l'histoire carolingienne*』を公表している。この史料研究の過程で、モノーはフュステル・ド・クラランジュの史料の取り扱いに疑問を提出し、比較か分析かという有名な方法論争を惹き起こしたのである。⁽⁵⁾ともあれ、このような史実の考証についてのモノーの地道な努力こそが、フランス歴史学の土台を築いたのである。ジョルジュ・ルフェーヴルも述べるように、フランスにおいて「考証の発展は、とりわけガブリエル・モノーに負っていた」のである。⁽⁶⁾モノーの異色の弟子であったロマン・ロランも、「私がいちばんよく他の仕事のために学んだことは、歴史の技術、原典批判である」と述べている。⁽⁷⁾

史料研究とならんで、モノーがフランス史の文献目録をまとめたことも、かれの業績として逸することはできない。この作業も高等研究院で始められたが、モデルはやはりドイツにあった。ダールマンによって編まれ、ヴァイツによって改訂されたドイツ史のビブリオグラフィー、『ドイツ史文献案内 *Quellenkunde zur deutsche Geschichte*』がそ

れである。モノーの『フランス史文献目録』⁽⁸⁾（二八八八年）は、ルルー、モリニエ兄弟、アノトー、フィステルといった弟子の協力を得て上梓された。この『フランス史文献目録』ほど詳細で行き届いた文献案内は、それまでのフランスにはなかったのである。モノーの口から自負の口吻がもれるのも、むべなるかなである。「われわれが今、出版する目録に代わりうる目録は一冊もなかった。その不十分さにもかかわらず、この目録が真に役立つとわれわれは確信している。」（*Bibliographie, préface, pp. vii-viii.*）『フランス史文献目録』はサブタイトルにも示されているように、方法論と編年史の二部構成をとっている。そして四五四二の文献が編年史的かつ主題的にならべられ、基本文献には星印が付けられ、巻末には索引もつけられた。非常に便利な文献案内である。このように地味で幾分退屈でもある仕事を完成させたのも、ひとえにフランスの歴史学の発展をモノーが願えばこそであった。モノーは次のように、そのモチーフを率直に開陳している。やや長いが引用に値しうるのであろう。「大きな名誉や利益を得る希望もなく、しかもやりがいのない仕事に私がかかりの時間を捧げたのは、他の人に有益であろうという考え、とくに参考文献の未習熟によつて長い模索をよぎなくされ、このため多くの誤謬に身をさらすことになる若人に有益であろうという考えに、もっぱらよるのである。かれら若人のうちの誰かが、この『手びき』の著者にわずかでも感謝の気持をもつてくれるなら、私の苦労も十分報われるであろう。」（*Bibliographie, préface, p. xi.*）「不十分」というモノーの謙虚な言葉にもかかわらず、この『フランス史文献目録』が、その後のフランス史研究に裨益するところ大であったことについては贅言を要しない。八〇年後の一九六八年にこの文献目録が復刻されている事実は、モノーの仕事がいまだに価値を失っていない証左でもあろう。

またモノーは歴史学研究会 *Société historique* を一八八二年に結成し、歴史研究者に交流の場を与えた。本部事務局は、サン＝シモン・サークルにおかれた。歴史学研究会は、歴史研究と歴史教育に役立つ双書を出版している。この

研究会の会長をモノーは数回にわたって務めたが、歴史学研究会は一九〇〇年に解散している。⁽⁹⁾

次に、教育者モノーの活動を概観しよう。かれの教職生活は、一八六八年から一九〇五年までの三八年間と長期にわたっている。第三共和政の前期と重なるこの時期は、フランスの教育界を震撼させる事件があいついだ時代である。初等教育から高等教育にいたるまで、教育制度とその制度を産みかつ動かす教育理念とが、ドラスティックな変更を被った時代であったからである。近代的な制度としての学校が誕生したのがこの時代であったのである。これを論ずることは本稿の課題ではないが、⁽¹⁰⁾この変革に、オポルチュニストの共和政を支持した実証主義史家が関与していたことを指摘しておこう。モノーもその一人であった。

モノーは早くから民衆の教育にあたることを望んでいたが、その願いはアルザス学院 *l'Ecole alsacienne* と民衆大学によって実現された。⁽¹¹⁾アルザス学院は、一八七四年に創立された。モノーも創立者の一人である。アルザス学院は、プロテスタントイイズムを建学の精神とする自由学校で、モノーは一八七四年から七八年まで、ここで一〇歳から一歳の子供たちに近代史を教えたのである。またモノーは、一九世紀末に、民衆大学に関与し、労働者を教えてもいる。

しかしモノーの教育活動の中心は、高等教育にあった。モノーは中等教育の改革についても提言しているが、⁽¹²⁾かれにとつて高等教育の改革は、歴史研究者の養成という観点からも切実であったといえる。モノーは一八七六年に、大学の公開講義が大学の研究水準を低下させる元凶であると告発する一文を公表し、一八八〇年にはラヴィスたちとともに「高等教育協会 *Société de l'Enseignement supérieur*」を結成して、高等教育の改革を訴えていた。⁽¹³⁾かれは高等教育の改革として、孤立して存在する学部間に絆を創出し、これらの学部を教育上財政上の自治をもった総合大学に統合することを要求した。ところがモノーは、教育改革を審議する委員会の委員でもなく、実質的な活動はしていない。⁽¹⁴⁾教育者モノーの活動は、何よりも後継者の育成にあったのである。かれはいわば師傅であった。それはモノー

の職歴を一瞥したとき、明らかになるであろう。

モノーは、フランスの代表的な高等教育機関での教授経験をもっていた。⁽¹⁵⁾ 本拠は一八六八年から一九〇五年まで勤務した高等研究院である。かれは一八九五年には、G・パリスの後任として研究院の第四部長になっている。また一八八〇年には、当時、校長を務めていたフュステル・ド・クラランジュによつて高等師範の講師に招かれ、一九〇二年まで兼任している。この人事は、親友のラヴィスがこの年に、高等師範からソルボンヌに移つたためにポストがあいたことによるものである。高等師範がソルボンヌに吸収された一九〇三年からは、モノーはソルボンヌの教授にもなっているが、実際にはかれはソルボンヌでは講義をしなかつた。一九〇五年からは、コレージュ・ド・フランスでミシュレ論についての講義を引きうけたこと以外、一切の公職を退いたのである。コレージュ・ド・フランスではミシュレ論のほか、歴史の方法やイエズス派についての講義もしている。高等師範では、メロヴィング朝からヴァロワ朝までのフランスの諸制度や宗教改革、それに一八世紀の王政とフランス革命の哲学的起源についての講義を行つたりした。これらの講義が、高等研究院での史料・文献研究に裏打ちされていたことは、言うをまたない。

これらの高等教育研究機関で、モノーは数世代の学生を育てたのである。かれは科学的方法や慎重な一般化について教授し、教え子たちはそれをリセや学部で普及させたのである。かくして実証主義史学は、裾野を広げてゆく。このような実証主義史学の魅力の一斑は、ロマン・ロランの日記に明らかである。ロマン・ロランが高等師範で史学科に進んだのも、「いまの大学では、史学教育を司っている精神がすべてのうちで最も自由である」と考えたからにほかならないし、このゆえに「最も科学的な歴史は、多くの優秀な人材を集めたのである。」⁽¹⁶⁾

約四〇年間の教職活動を通じて、モノーは多くの弟子を養成している。『史学雑誌』の編集に関与した弟子に、ファニエ、ベモン、フィステル、ルイ・アルファンらがいる。また『史学雑誌』への投稿やモノーの助言によつて成長し

た歴史家に、エミール・ブルジョア、アンリ・オーゼル、カミーユ・ジュリアン、ラングロワらがいた⁽¹⁷⁾。さらに一八九五年に高等研究院第四部長に就任したことを祝って、モノーに捧げられた『中世史研究 *Etudes d'histoire du moyen âge*』に寄せられた一五〇名の歴史家の名を見ると、われわれはモノーの影響力の大きさを改めて知るのである。これまで本稿で言及してきた歴史家以外に、フェルディナン・ロート、アンリ・セー、アンリ・ピレンヌ、フィリップ・サニャックらの名前をそこに認めることができる⁽¹⁸⁾。しかもジュール・ロアが高等研究院でモノーの後継者となり、ガブリエル・アノトー⁽¹⁹⁾が研究院に新設された近代史講座に就任したように、高等教育研究機関の歴史学講座は、モノーの同僚や弟子によって占められたのである。実証主義史家が、ソルボンヌや高等師範その他の大学の歴史学の新設講座や空席講座のポストを掌握していったのは、一九世紀最後の二〇年間であった。かくして実証主義史学のクラスター⁽²⁰⁾ cluster が、支持集団が形成されてゆくのである。

- (1) Monod, "Etudes sur l'histoire de Hugues Capet." *R.H.* XXVIII (1885), 241-272. モノーが果たせなかったカペー伝を完成させたのが、フェルディナン・ロートである。Ferdinand Lot, *Etudes sur le règne de Hugues Capet et la fin du X^e siècle* (Paris, 1903), XL-525p.
- (2) Monod, *Etudes critiques sur les sources de l'histoire mérovingienne* (Paris, 1872), rpt., 1978, p. 16.
- (3) モノーも「この種の演習は、高等師範の時間割にも古文書学院の時間割にもなかった」と記しているように (*Ibid.*, p. 1)、「高等研究院はゼミナール制度をドイツから導入した最初の研究機関であったことを想起されたい(渡邊和行「歴史家の誕生」前掲、四〇頁を参照)。高等研究員の正式名称は、高等研究実習院であるが、この命名に「方法は理論よりもむしろ実習のうちに存する」(デカルト『方法序説』落合太郎訳、岩波文庫、一九七二年版、六頁)というデカルト精神の具現を見てとることができるであろう。
- (4) R. Reuss, *Revue critique* (17 mai 1873), 308-312., W. Arndt, *Historische Zeitschrift*, XXVIII (1872), 415-422.
- (5) Harrison, *op. cit.*, pp. 179, 229-233., Monod, "Fustel de Coulanges" in Monod, *Portraits et souvenirs*, (Paris, 1897), p. 144.

- (9) G. Lefebvre, *op. cit.*, p. 291.
- (7) 『ロマン・ロラン全集 17 自伝と回想』宮本正清訳 (みすず書房、一九六九年) 四〇頁。
- (8) Monod, *Bibliographie de l'histoire de France : catalogue méthodique et chronologique des sources et des ouvrages relatif à l'histoire de France depuis les origines jusqu'en 1789* (Paris, 1888), rpt. (Bruxelles, 1968). 文献目録の項目の記述は、すべて本書の「序文 préface」に依拠している。従って引用箇所の注記は、本文中に Bibliographie, préface と略記し、ページ数を明記してあるべきである。
- (9) Monod, "Les études historiques en France," *Revue internationale de l'enseignement*, XVIII (1889), 592. Bémont, R. H., CX (1912), viii.
- (10) 第二帝制から第三共和政にかけての教育改革に関する文献は、夥しいほどであるが、基本的な文献を二、三あげておこう。Mona Ozouf, *L'école, l'église et la République 1871-1914* (Ed. Cana, 1982). George Weisz, *The Emergence of Modern Universities in France 1863-1914* (Princeton U. P., 1983). Robert D. Anderson, *Education in France 1848-1870* (Oxford, 1975). Sandra Horvath-Peterson, *Victor Duruy and French Education : Liberal Reform in the Second Empire* (Baton Rouge, 1984).
- (11) Harrison, *op. cit.*, pp. 253-255, 307-308.
- (12) Monod, "Les réformes de l'enseignement secondaire," *R. H.*, XIV (1880), 356-369.
- (13) Keylor, *op. cit.*, pp. 56, 60-61. 一八七六年に発表した文書とは、*De la possibilité d'une réforme de l'enseignement supérieur* である。それから「高等教育協会」の機関誌が、本稿でもしばしば利用している *Revue internationale de l'enseignement* である。
- (14) Harrison, *op. cit.*, pp. 259-260.
- (15) 以下のモノーの履歴については、*R. H.*, CX (1912), viii-xxiii.
- (16) 以上、『ロマン・ロラン全集 32 ユルム街の僧院』蛸原・波多野訳 (みすず書房、一九六八年) 一三二、一三〇一頁。
- (17) Pfister, "Le cinquantenaire de la Revue historique," in *Histoire et historiens depuis cinquante ans*, t. I, p. xi.
- (18) Harrison, *op. cit.*, pp. 226-227. Keylor, *op. cit.*, p. 240, "Hommage à M. Gabriel Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXII (1896), 547-553.
- (19) アントーはのちに外務大臣になるが、ドレフュス事件を契機に、モノーとの関係は悪化した。Harrison, *op. cit.*, pp. 296-297.

(20) T・N・クラークによれば「クラスターとは、なすべき仕事について最小限の中核的信念を共有し、しかもある領域の研究と教育の前進のために協力しあう一群の人々の結合である。」Terry N. Clark, *Prophets and Patrons: The France University and the Emergence of the Social Sciences* (Harvard, 1973), pp. 67-68.

五 む す び

われわれは歴史家モノーが、学問としての歴史学をフランスに確立するために献身した姿を描いてきた。モノーは象牙の塔にこもって、自己満足的な研究に精をだす歴史家ではなかった。キリスト教的使命観や自己犠牲の精神が、モノーを八面六臂の活動に導いたのである。『史学雑誌』の創刊・史料集・文献目録などによる歴史学の基礎づくりから、ゼミナール教育を通じての歴史学方法論の伝授と後継者の養成という歴史学の人づくりと、モノーの活動は多方面に及んでいるのである。フランス歴史学のオルガナイザーが、モノーであった。

またモノーは、「科学的な一般的観念」と考証との結合を主張する歴史家でもあった。すでに一八七六年の「進歩」のなかで、ドイツ史学の瑣末主義を指弾し、文学と考証の総合を説いていたモノーである。かれは決して矮小な考証に没頭し、それに満足する歴史家ではなかったのである。このようなモノーの歴史思想は、「過剰経験主義」とか「科学的唯名論」というカテゴリーから、ほど遠いものであると言わざるをえない。

モノーは一九世紀末に再び、方法の問題を考察することになる。⁽¹⁾歴史学と社会科学との関係について、方法論のレヴェルで回答することが要請されたからである。それに同時期のドイツで、ランプレヒト論争が繰り広げられていた

ことも、このような気運を醸成させたはずである。⁽²⁾ ドイツよりマイナーな形ではあれ、フランスにも同様の状況が生じたのである。モノーの指導のもと、実証主義史学が、フランスの歴史学を制覇したそのときに、実証主義史学は新たな挑戦に直面していたのである。一つはデュルケーム社会学からの批判であり、他の一つはアンリ・ベールによる歴史学内部からの批判であった。これら二つの批判は、今日では、社会史パラダイムへの転換を画するものとして位置づけられている。このような批判が生まれた背景として、当時のフランス史学が「総合」を放棄し、素朴実証主義ないし史料実証主義の陥穽におちこんでいたことを指摘しうるであろう。モノーの眼光は、フランス史学の閉塞状況と歴史学内部の新たな胎動を見逃さなかった。モノーがミシュレに接近し、歴史の方法を自己の課題とするのは、ここにおいてである。⁽³⁾ やはり「すべての事実的知識には、それを基礎づける原理的な層が必要なのである。」⁽⁴⁾ さもなければ歴史学は、過去の事実を単に収集し記述する学問に墮すことであろう。単なる事実学は単なる事実人を生むにすぎない。このような毀言を被らないためにも、モノーは方法の問題を再考せざるをえなかったのである。

モノーは一九〇四年に、高等師範の有力な校長候補として推輓されたが、かれは自身の健康上の理由や息子ベルナールが重病であったこと、それにミシュレ研究に専心したいことなどの理由でそれを固辞した。⁽⁵⁾ 一九〇五年以降、モノーはコレージュ・ド・フランスの講義を担当し、『史学雑誌』の編集を続ける以外、一切の公職を退いたのである。ようやくモノーに、自己の研究に専念できる時間が生まれた。しかしかれに残された時間は僅少であった。癌がモノーの体を蝕んでいたからである。一九一一年の一二月に胃の手術をしたものの、術後の回復ははかばかしくなかった。われわれはモノーの病状を、ロマン・ロランの手紙に窺うことができる。「可哀そうにガブリエル・モノーはもうだめだと思えます。人の言うところによると、彼は胃にがん腫性の腫物があつたそうです。幽門の切除を行いました。手術は成功しました。しかしその結果がたいへんです。心臓が回復しません。それに、たとい心臓が回復したところで、

病いが再発すると思われる節が多すぎます。可哀そうな人！一ヶ月まえから、病院のベッドで苦しんでいます。⁽⁶⁾重態であつたにもかかわらず、入院する前夜、ベモンにしたためた手紙のなかで、モノーは「前進せねばならない」と記した。⁽⁷⁾これはモノーの一生を動機づける言葉である。歴史学の前進、学問の前進、人類と文明の進歩、これこそモノーが求め努力したものであつた。体系的なミシュレ論も方法論もまとめられることなく、一九一二年四月一〇日、モノーは不帰の人となつた。享年、六八歳であつた。

最後に、高等師範でモノーはリュシアン・フェーヴルを教えたか否かという興味深い問題に論及して、稿を閉じよう。一八七九年と一八八八年の二度にわたつて腸の大出血をおこしていることから想像されるように、モノーは頑健な体軀の持主ではなかつた。⁽⁸⁾モノーは健康上の理由で、一八九三―一九四年と一八九七―一九九年、それに一九〇二―〇四の全学期、一九〇四―〇五年の大半を休職しているのである。九〇年代にモノーの代役を務めたのがエミール・ブルジョアであり、二〇世紀にはいつて代役を務めたのがフィステルであつた。⁽⁹⁾フェーヴルが高等師範に入学したのは、一八九八年ないし九九年である。すでに歴史家になる気をなくし、文学科に在籍したフェーヴルが、歴史の講義を受講しえたのか不明である。少くともリセでE・ブルジョアの講義に失望していたかれが、高等師範で再びブルジョアの講義を聴講するとは考えられない。それでも一九〇二年にフェーヴルが、歴史と地理の一級教員資格試験に合格したことを勘合すると、かれが三年次にモノーの講義を聞いた可能性は否定しえないのである。フェーヴルがモノーを「私の師」と呼び、学位論文の執筆について意見を交換したりしている事実は、モノーとフェーヴルの関係が高等師範時代に遡ることを傍証している。⁽¹⁰⁾しかしフェーヴルがモノーの講義を聞いたにせよ、モノーの講義も感銘を与える名講義からは、ほど遠かつたようである。当時の学生にとって、モノーやヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ、ギユスターヴ・ブロック（マルク・ブロックの父）らは古くさくて退屈な教授であつた。モノーと個人的交際があり、モ

ノーに好意的なロマン・ロランも、モノーの講義はおもしろ味がなくて暖かさと活力に欠け、眠けを催させると評している⁽¹¹⁾。従って魅力に乏しいモノーの講義が、クリオの女神への愛着をフェーヴルの心に呼びもどしたかどうか疑問なところである。

- (1) Monod, "Observations de M. Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXI (1896), 541-546. 中の一文は「Charles Bémont, "Bulletin historique," *R. H.*, LXI (1896), 323-327. に全文引用されている。
- (2) ランプレヒト論争に対するフランス側からの反応として、例えば Henri Pirenne, "Une polémique historique en Allemagne," *R. H.*, LXIV (1897), 50-57. 邦語文献でこの論争を紹介したものとして、古いものでは、上原専祿『歴史学序説』(大明堂、一九五八年)、最近のものに、西山勤二「カール・ランプレヒト対新ランケ学派あるいは理論対歴史」『研究紀要』(橘女子大学) 第七号、一九七九年、奥田隆男「リツカートとランプレヒト論争」『経済論叢』(京都大学) 第一三六巻第四号、一九八五年がある。
- (3) 晩年のモノーのミシュレ論と歴史の方法については、次稿で論ずる予定である。
- (4) カール・マンハイム『歴史主義・保守主義』森博訳(恒星社厚生閣、一九六九年) 二二八頁。
- (5) 『ロマン・ロラン全集』34 したいしソフィア『宮本・山上訳(みすず書房、一九六六年) 一六五頁。Harrison, *op. cit.*, p. 236. 結局、校長に就任したのは、モノーの親友エルネスト・ラヴィスであった。ロマン・ロランはラヴィスを、「親切だが気むずかし屋で、ソルボンヌの無冠の王」と評していたが(『ロマン・ロラン全集』17 自伝と回想』前掲、二二二頁)、校長就任によって文字通り「戴冠の王」となったのである。なお子息ベルナルは一九〇五年に死去し、モノー自らがネクロロジの筆をとっている(*R. H.*, LXXXVII, 1905, 310 ff.)。
- (6) 『ロマン・ロラン全集』34 前掲、四五二頁。
- (7) Bémont, "Gabriel Monod," *op. cit.*, i.
- (8) *Ibid.*, xii. 二回目の出血のときは、ロマン・ロランも見舞に行っている。『ロマン・ロラン全集』32 ユルム街の僧院』前掲、二二九頁。
- (9) 以上、Harrison, *op. cit.*, pp. 234-235. なお一九〇三年のロマン・ロランの手紙にも、モノーの健康がすぐれないことがしばしば

登場する。『ロマン・ロラン全集 34』前掲、一一〇、一二六頁。

(10) Febvre, *Combats pour l'histoire*, p. 18, p. 423. 邦訳、二五、一三四頁。Guy Massicotte, *L'histoire problème : la méthode de Lucien Febvre* (St. Hyacinthe, 1981), pp. 107-108.

(11) 『ロマン・ロラン全集 32』前掲、二九七頁。Harrison, *op. cit.*, pp. 236-237, 242.

(一九八六年一〇月脱稿)

〈お詫びと訂正〉『香川法学』第六卷第三号所収の拙稿に誤植と脱字がありました。

(1) 二六頁三行目、還歴↓還曆。(2) 二九頁一行目と三一頁六行目、オルガ↓オリガ。(3) 三一頁の注(24)、ヘルツェン↓ゲルツェン。(4) 四五頁の注(34)、Allmands → Allemands